

近代百物語
一

2293

一八八

道代百物録

一五

共四
每五百九号



本東



近代百物語叙

叙述文者の大徳大イナウレ
 上智紙さしとを小不可後徽州のる
 大徳紙得下悉く少くも世
 因果をもつて無紙あり善を
 長く中品は海度の法便作べ
 其小庵しは將煙あり
 しるらんがや煙乃大イナウレ
 世は其の傍ありと通ふ此方



傳傳或もやれりてり思ふ心まの
 後後とつて心川崎氏書るとい
 五冊とわらふ是の煙を小なる物
 大い成地と大益あり小なる物
 少猶なくんべりしは少紙の持り
 一とせふるの煙是ふらとる者
 少す也し

明和七年

寅正月吉辰

鳥羽醉翁題

近代百物語目錄

一之巻

二世のちごりの打付に強
 子に甲斐さた蘇生の怪
 かね登り勢ぞ何へ

二之巻

失つて孤道に瓶に妖怪
 貪欲心がまの提乃ち
 ころの山出果酒屋

三之巻

形馬よぬまね仕合者

世々巻

磨ぬのりて鏡屋が引導
瓶の嫁入 出生れ男 女

勇気然るく鬼面大神
怒のわびくハ尻乃火あん
山の神も蟹が好物

みえ巻

巡行むくひと車の粉
猫人へ化して居る小衆
蒸然とんざりてまはれ

想目錄終

近代百物語巻一

二世の勢の釘づけの縁

後より移りて元々とはとて古人の妙言万ゆいろよ
かへて中らびさば必終せんとりしものや今ハびり
傳説主として小僧ありて國ハ伯耆の國に人ありて十二
果りの出家とてりて学文れぬにてて徳國より新神なる
かきぬ万人よすむれなる英僧きていなる人ありてあねと
さくや海ざんハさうりけりありとて然後の國言國とてり
而して佛書の譯讀ありしはそとて四方一宇ハれば傳説を
もたるとしてその國よとてりて毎日あつだんの席よすむ

妻もも妻もいふてそくのゆゑにば武蔵公をたぬ人
まもも御依を居人おろしてありし葉の枝にちやの
ことおろし忌日一の毎葉はつらつら休日一の湯飯とあて
へて芳公たすけなすけけるがまゝ病も田の町にむかへ
屋又高きつとりよ大あきんど一人のむきありのておつこと
名づく二八の容をきん花のくらむの一あび後しはま
かまけ峰腰をせんれびんどもをさう筋飛といふや
りさあらしら一日傍ら紙中移る孫葉名はれりてま
しよ傍らもは紙紙一和音紙紙むごう傍ら根
おつ杯の傍らの葉會いするのそとわうげもをせと

さうのぞれーみせとぬー傍らも和音と源とまのーび
のもしよ親おとよをさうてむら紙見ーしり悪のやま
とさうとらぬてのそくせーがすみつけのりよはま
まおもうげれ身にそみてつや中ーれ井のふ度やいんそと
てんもさうぬーとゆ紙あめー葉のあや人目のせとらお
せらーそれど蝶とをもと免つひやしう、傍らをも款
うもらうめいひみだたさうであまのなが日あしたかよぬ
の救ふまよあゆれば大いよせで後と戒仏道よまは
さーかくすてまびーかひとなく今けとと病よ一心は
落し廿元紙とらう破戒せんゆかそびーくあをど

天魔の障^{しやうま}碍^{がい}をくぐり^{くぐ}り^り所^{ところ}もあらく^く立^たち^ちあ^あり^りと^と多^たく^くの
 み^みと^と取^とり^り出^です^す一^{いつ}封^{ふう}の^のま^まし^して^ての^のあ^あら^らを^を焼^やく^く柱^{ちゆう}杖^{じやう}と^と友^{とも}ふ
 一^{いつ}衣^い一^{いつ}袴^{はかま}身^みの^のう^うれ^れを^をと^とれ^れさ^さと^と見^みさ^さと^と古^この^のあ^あい^いと^と見^みせ^せ
 一^{いつ}く^くバ^バお^おは^はは^はの^のあ^あら^らは^はま^まを^をま^まへ^へう^うぬ^ぬめ^めり^りや^やう^うと^とせ^せよ^よう^うへ^へ
 て^て足^{あし}の^のま^まを^をた^たも^もか^かま^まり^りの^のバ^バ登^{のぼ}り^りの^のゆ^ゆを^をほ^ほろ^ろし^し後^ごへ^へよ
 す^すぐ^ぐう^う位^いあ^あう^う一^{いつ}く^くも^もち^ちり^りき^きを^をと^とれ^れ床^{しよ}蓑^い蓑^いの^のう^う
 を^をと^とき^きと^とめ^めく^く日^ひ新^{あたら}申^{まを}の^のあ^あら^らは^はま^まを^をた^たの^のま^ます^すく^く
 く^く見^みへ^へた^たれ^れば^ば友^{とも}親^{おや}の^のあ^あら^らは^はま^まを^をと^とれ^れさ^さと^と見^みさ^さと^と古^この^のあ^あい^いと^と見^みせ^せ
 神^{かみ}よ^よ詣^{まよ}つ^つ佛^{ぶつ}よ^よへの^のま^まを^を侍^{まへ}と^とと^とき^きと^とぬ^ぬめ^めり^りの^のあ^あら^らは^はま^まを^をと^とれ^れさ^さと^と見^みさ^さと^と古^この^のあ^あい^いと^と見^みせ^せ
 つ^つ死^して^てと^とう^うき^きく^くま^まお^おー^ーや^やニ^ニハ^ハの^のし^しが^が終^はる^る花^{はな}さ^さと^とよ^よあ^あら^らじ^じよ



世々釜の煮る時

お灸さしてきて

まじいを

叔有ゆえ

ちりちり

むく吐ふ
 ちん登のむけて

今宵の月

是夜
 写し
 絵書見さ
 ろる
 ろる



ちん登されて今ハ名のと登のちん登は登主ハ古つり
 庵居一日夜書籍み眼しし十六六つとれ
 乃みや光陰とてゆもと茶茶つりし二十余ひいさ
 やあれとて京都よ立ちへゆるれ人のあつぬさいもひ
 冥佛冥社と巡ね一各西古跡も一見せんとすこゝあ
 出向まこれりて墨傍れやとて茶田派助とて人
 の中修苑主が叔父なりしつらつり派行とて死し死し
 也ハ派助ま娘對面一四方やまのえきれらちをの方
 いみへ越後の國へくづりゆもを十みひいんかて血氣
 さうんの宛中なりしつ三十歳少とあすれぬ也ハ盤を

もたふをうごもあれてむうのやちのちた死をせと物めて
甲のりたれば借養をなぬる内と新後ふりて立はりしが
十又子よちりしよふ若僧のかへ川くわすしよよくこそ
おだへさつぬとあいにしめすればはまのよもぞり此秋のこ
る拙者が妻懐妊して誕生せし女子十四歳これと控
のびうがら娘も追討は月よりけんと内室をおくよ入
あむくくありや娘もいづくたぬあぬとせんとき一の被
むきわ名のおつひのいひまきるといふあはれば借養をせ
母も内目よかりたてに出家た男といひあをたを國今般
ふいごれ上系やうに娘終ら中をうけぬりるとたやあつひ

が顔のいね赤い瓜とくぐがおくくゆく眉毛さうきふり
しつゝみ内身より言田でまきくしおつひよりきありの
めぬぬくこれまで中をまきしそと借養をいひごれ
はさつやでも寝てもそつひはかぬ今もあてころ
されてもあましめ内身より言海といひ我一念ぬきして
見せんと愈怒のいさなひのきんやもさつしりる深物
史ぬのあされさつひつたなる中をとりぬぬを借養を
あまがぬさつひ我かく出家とあてたれとも過去のがうり
はさつして眼あ希代の女娘あありき古今を双の玩変
たんとさつひつたつたつたつたつたつたつたつたつた

あちぢぬがさかたのんがと瓜さしとて借虎とふ教訓一
 還俗して支ぬしや中我わと續てぬれとそ日と完上
 吉日と婚嫁瓜さうおこさひ支ぬとやてくそ一が友白
 髪まきくぢひとて多うや内悪業ぬん人とのぬかす
 かととつてぬ

つみおひひりた蘇生そせいのねびねび

昔一狐こまぬと大猪おほいのこを人よ託たくといひうじを新あらたぬと
 向むかへ科こり兒こよ殺ころせし赤角あかかくとさぞすたんと兒こはかき
 らぐたき一カ皮膚いひ膚ふよわけ入いり人城ひとしろして病やましむ也
 医書いしょも邪祟よこしまの論ろん方かたあれバ令たまく虚うつ言ことといひがて



魁いざなといふ抱かか

あれがううせ

何なんのううまか

さふまものこ

考こうふりつらま

さむいよささる

初はつくまべいそ

嵐あらしさどろん喰くふ

秘ひをさすじの

ぶとく

あらうへるが

つまらさ
 つまらさ

養父とてはもとより心づかひと後づけられたの杖の書け
りさけなれば村の由きと竹とが時渡しのあつたそのよ
うして大徳川と宇とをくくく今之書目といふがうぬ
弱のぞよむう改痛がするやうなりやうが席巻の死病の
うらやもさうよおのびかまひもかりな中川に又日へん
わがせとゆえんうらやせ合ふの心す先三日とせうと
おきうが大徳川といふもあつてをさへ入るべしといふ
なうを夜直とぬくぬえうらやといふのこしの容納うら
熱身もあつて終つてすれがあつてもやういふよあつて
したのう一医考の書目といふもあつて入るはして看病すれども

毎日よりたふ気もきく今ハ世の多くつれてた十二
歳と一歳うつむりつたは書きのいけてもぬらでおち
りれば又母のさげそのやどらうかあつたれうれどし
うらやにるが目のいぢりしさをいひききいよせいであつた
おとこをあせ書れうたをやる遊給てさすをうけ
るよえんうらやうら死んだ色のつれよとくくの大徳川
世のあかつたゆり中人とて書かあつたうらやうら
うらやべしうらや飛嵐の太よかまれてあつた生をうらや
のべしうらやうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
我子の書院のうらやうらうらうらうらうらうらうらうらうら

びんがさきさねれど大無の毛の血まみれ何のりりした
 中々死なると一髪もさかぬとどのちかぬへんふり
 へいしやま龍氣の口をささくれども死にんぬみ死せし
 六葉が家へ入るとあつてあつておのれをささくれども
 くしていれどいれどいれどいれどいれどいれどいれど
 ありなりいれどいれどいれどいれどいれどいれどいれど
 那寺へ八人旅をいれどいれどいれどいれどいれどいれど
 こそいれどいれどいれどいれどいれどいれどいれど
 そのいれどいれどいれどいれどいれどいれどいれど
 一唾もささくれどいれどいれどいれどいれどいれど



秋神國を非のおく
 男女史奴のむまびを
 出雲の大社ふ非
 集りせむい
 定めしむふ
 十をりけむ
 皆非のこむめ
 史まぬの
 源なれど

まふむつ
 まぐく
 有



神のしほい
並せよ縁

すむる狐のまふ

思ふを神の

まふてる者さて

あふふ叶ふぬ

車

のし
あまあり

ぬぐ

出雲
大
中
風
京

祢子狐のていへまふてかをせつ風のちかあがし
 てい月狐のめじてうけまりの又六日へ食をともりて
 もめ一門の合狐のていあけもた大福をまう
 あうすかてくた後まいつりてぬりまいて只う
 せ食のていあけくちたうまもてかりうさてい
 祢子のまふれいひじしう較もまふてい
 せよせこの又まふ後のらん気とかあれバ次第
 んもあまふていとな狐も養生おころりぬくま移ん
 せうせすれたれどもうたのりぬ実神されバ一門中
 しりせ出いお模の國へ名あけりる免治の上るあけ川

石仙今成日の出とていふうとせむし高岡あきまき
いさら巻見うるとこつんが吃子むらびらうりあびつれ
一火でその舟よいあかとりうとさひきうらさきまぬ竹興
よのせつをゆれて石仙の煮えうけ一火すめればい
さちりくととき容積人あさぬ夢言の印だそしと
きんぐとまこつれうやさく変化のおおきく神人
らうたあさむいなんうたうはまじと日村一深居
て徳義徳の傍あやさればこれいさひいひのうら
たのま塩飯のまんと七月があつと世先をけくいのん
む七月あつはのぐあげさく今が口中をうられ

あつ死向さりのぬけ物とていふさればきらまら
息をうて死うがひさうのうらげをこれとまら
く龍嵐の気さく今がむらぬやまうく奇怪
とさきとさくあか人れあつれ

ちん金勢終へ

たちをあつ迷勢の本筋三巻の一人あつてあつさう
なつされともむらんの企さうありしある日様ゆ
そのへ版とめく西一かべ登十あまうらうべて煮るお
ようやく熟せんときるにかまとれうらうつ死うら
あつてかまどぬえあつて一又をうらあべうらも下

かゝりて登壇のせ登三つ瓜九つのおさべいふたに
の小登小登をつれてかまどれうへより地におり
て門とぞお隣におとほきてこれとあるた
とあて門へ出るも中一足とれるかべとぞとゆ
あさつと子供ありて能く登あるととぞとぞ
はるんか捨くゆくやとわらふ登とのせたる
地におるよと死あつたれと足おきとてお
あてゆ死四束の川へ出てまけまけ
なんまの足とつるぐとくとおれとぞ
をよりまこれおれとぞとほとぞとぞ

日くせよいころとく
迷勢ハ流刑せとせぬた
らぬとぞとや

四のりよ

一弦本伴勢道中双六 全三冊

け書ハ本海道一冊初巻一冊
伴勢と糸一冊初巻二冊
晴まけとあまの